

## 不安二題

高島 洋

一  
酒場ののれんをくぐった途端に顔を合せてしまったやあしばらく

わたしがM製鋼で労組の役員をしていたとき  
彼も職場委員だった

ずいぶん慎重派で

企業あつての労組だとよく主張したものである

まあ一ぱいということでもならんでのみはじめる

彼はしきりに最近の鉄鋼の不況を心配した

じぶんの安定はじぶんで、人は見てくれないとも言った

そのときふたりの新客が入ってきて

そとは雨になったと話している

そう言えば

目前の彼はゴム長をはいていて

洋傘も持っている

完全武装やと笑いながら

雨になった先見と

用意の周到さを誇った

わたしの酔眼はしだいに

彼のハンチングのような帽子が鉄帽に見え

洋傘が自動小銃に見えてきた  
もうかえらんといかん

わたしは立上った

あまり心配ばかりするなよ ころつといくぜ

笑いながら握手した

雨のなかをわたしは駅にむかつて急いだ

二

人はじつとしてしていると不安がつるものらしい

(工場へ来て 働いているときがいちばんいいのです 何

もかも忘れてしまいますから)

そう言ったのは

小柄でよくうごく現場マンだった

いつからか彼が現場にいなくなり

わたしも彼を忘れかけていた

ある日

電車のなかではったり出合い

彼はリュウとした服装をして にこにこしていた

わたしの問いに

はあ いま大阪支社の調整課にいます

(ああそうか事務畑にひきあげられたんだな)

彼が下車すべく

手をふって

扉の方にあるいていったそのとき

ふとそのうしろ姿の肩のあたりに何か愁いの影を見た

## パチンコ考

—そのI「玉」

姜 舜

はじかれる

これからの玉の行方は

たくまれた意匠がとりどりに彩られた

ケチな台の中の

見え透えた版図への挑戦。

無数にはりめぐらした鉤の

無情な林をくぐる柵の中の細道、

いくたびか花卉がひらくこともあるが

玉をにぎったものの欲望が点滅する

賭けの台。

はじかれ

はじかれて上昇し

さんざんな激突のあげくに待つのは

落下

ひたすらな落下現象。

それでも玉には選ぶ権利はなかったのだ。

垂直のコースであれ

左右の変化であれ

頂門への集中であれ

右顧左眊の弱気が泡立ち

くりかえすアウトのために

地団太ふむ落下のほかに道はない。

いったん射程距離がきまり

遠近の妙をつくしたにせよ

いずれかの障碍に出逢い

とどのつまり乱世の浮身となる

そこは——

玉自体の利益も未来も度外視されたところ

自我を主張するとはもつての外だ。

玉は、いつも

はずれる運命にある。

成功の鈴がりんりと鳴り渡ったからとて

玉の心境はうつろ、

勝利に酔うこともなく

すべて、これ

はじくものの作図でしかない。

指一本の

偶然な成果、

または手練のわざが再現されるにしても

欲の皮がつつ張り

時間を忘失する安価なあそび

そして 昼夜をわかつた

仕組まれた管制は常にそらぞらしい。

館内では

ふたたび軍艦マーチが再演される中で

血走った狂乱が

よごれた空気をみなぎらせ

いつも支配される

玉は

あさからまた落下の連続だ。

# アカシヤの花

和田英子

やせて小柄な祖父と  
白髪まじりの夫が  
声もなく座敷に坐っている  
百日線香のほそいゆらぎ  
脳腫よう切開のあと  
急死したひとの骨 一包み  
笑顔の遺影が  
死児や消えた男をつつみこんでいる

駅前専門店  
腕を組みゆっくり歩く後ろ姿を見た  
振り返ったサングラスの奥  
薄明りの視力をはねかえして  
花道展を話す早口の口調は  
以前と全く変らない  
再婚間もない夫に腕をとられ  
今様お里沢市は人ごみにかくれた

古い写真一葉

素直な髪を内巻きにし  
肩台の張った上衣をきて  
茶色にひかる目をこちらにむける  
二十一才 昭和二十三年 春  
女子寮から工場へ通う道に  
アカシヤの花は風にゆれ  
月おくれにくる洋画封切館へ  
若い組合員とつれ立ち

復員した眉の濃い技師を慕い  
女子寮生の自殺に耳をそばだてる  
せわしない蜜蜂の羽音のさなか  
不況 アイドル 争議 分裂  
不穏なうわさのとびかう中で  
誰彼の去就を克明に語った彼女

四散して数年後  
結婚した男が家に帰らず

産み月近い胎児をおろしたと  
人づてに聞いた

古い写真の襟もとの飾りは  
わたしがつくったフェルト細工だ  
グループのシンボルに  
縫いふくらんだハート型が三つ  
アカシヤの花の匂いにゆれ  
やがて千切れて  
裸電球の現場事務所の  
ガラス窓が風に鳴る  
わたしと彼女

予科練帰り 元陸軍飛行士  
咳こんで死んだ疎開者  
せまい事務所の机の持ち主は  
音信とだえ  
全員 不在だ

# マトリョーシカ

野口清子

朝 眼がさめると  
オレンジ色のネッカチーフをかぶった  
マトリョーシカが立っていて  
なんだ というように  
私を見ているので  
なんだ、というように  
起き上って睨めかえすと  
まだ木の香のただよ  
木屑をこぼしたりしながら  
いくつもいくつも  
子供を並べて見せる  
だんだん小さくなる  
マトリョーシカの子供が  
みんなネッカチーフをかぶっていて  
ぐるりと私を  
とりかこんでしまう

眼ざめが遅かったかと  
あわてて 見まわすと  
亭主も息子もねむっていた  
ガス釜にスイッチをいれる

味噌汁をつくる  
昼めしのおかずも用意して  
休日出勤の朝  
駅まで霜の凍る道を  
走って行く

社会主義社会でも 女は解放されないと  
ボーヴォワール女史  
ソ連では離婚がふえ続け  
おくれげながら日本でも  
深夜作業 危険な仕事  
女も男も平等にやりましょう  
で、コンベアーベルトはますますはやめられ  
男も女も ふりまわされ  
ふりおとされ

ソ連生れのマトリョーシカは  
もっとやさしい娘の顔して  
赤いきれいな服きたのも  
あったのに  
私のえらんだマトリョーシカは  
土から生えた農婦のように  
ゴツツイ顔して  
私を見下す

一九七八・一二一  
マトリョーシカ。丸木をくりぬいて作っ  
た人形。小さいのから順々にいくつもの  
人形が母体の人形に納まっている。

# 秋空に

中野桂子

あの人、私と同じ年なのに。  
「うーそばかり。だってあの人  
しわだらけじゃん！」

「強いられた、やむを得ぬ農作業だったんだ  
から、  
生活と結びつかんはず」  
と、彼女に話を返す。

彼女は 数年前の町村合併で、はじめて  
私と 仕事仲間になった人だった。

仕事で同席すると いつもしんきくさく、

刈田を渡る西風が 冬を誘うのだが。  
部落と部落をつなぐ農道は 今は舗装されて  
かつこうのハイキングコースだ。

風呂場のかけ湯する下が 小便壺でな  
「はーん？」

この山野の風景の中では

「この道 とおる時な、  
どんなに 怖かったやら——」  
もう二〇年も前のことやが……」

「は、は、は、町の子にはわからんわからん」  
と彼女は 私にわらう。

私は、率いるきらびやかなトレーニングウェ  
アーの群を恥じる。

「雪の日の夜道、自転車ごと あの坂から  
田圃に とんぼりがえったり——、  
いろいろなことが あったんえ」

高女卒。永遠に未熟な自立者。  
場あたりの、軽妙に、自我を押し通しながら  
歩いてきた 私の三〇年。

「町の子には わからん」のなら  
「田園の中では 分からね」ものだって  
ある筈。

その日私は、「歩こう会」の婦人仲間たちの  
ために、一二キロのコースの道案内を  
彼女に依頼したのだった。

おもて看板は同じ「〇〇主事」。  
彼女に しわの重味があつてあたりまえ。  
戦争中の——  
森林の開墾。田畠の耕作。草刈り。とり入れ。  
私のそれは、それこそ場あたりで  
「戦争のたまもの」にすぎなかったから、  
やがて軽妙に 消費側に返ってしまう。

恥ずべきことは、  
体験に優越を感じるのみで  
「問題意識」を 持たぬことなのだ。  
柿の実のたわわな 影をうつす秋空に、  
束の間の「敗北」を投げ返して  
私は颯颯と 一二キロの山野を歩む。

「あのおばあさんが 歩いた道なんだから  
わたしんち 頑張らなくちゃね」  
「シィッ！ おばあさんなんて失礼な！  
彼女に依頼したのだった。」

「強いられた、やむを得ぬ農作業だったんだ  
から、  
生活と結びつかんはず」  
と、彼女に話を返す。

「あのおばあさんが 歩いた道なんだから  
わたしんち 頑張らなくちゃね」  
「シィッ！ おばあさんなんて失礼な！  
彼女に依頼したのだった。」

「強いられた、やむを得ぬ農作業だったんだ  
から、  
生活と結びつかんはず」  
と、彼女に話を返す。

「あのおばあさんが 歩いた道なんだから  
わたしんち 頑張らなくちゃね」  
「シィッ！ おばあさんなんて失礼な！  
彼女に依頼したのだった。」

「強いられた、やむを得ぬ農作業だったんだ  
から、  
生活と結びつかんはず」  
と、彼女に話を返す。

「あのおばあさんが 歩いた道なんだから  
わたしんち 頑張らなくちゃね」  
「シィッ！ おばあさんなんて失礼な！  
彼女に依頼したのだった。」

「強いられた、やむを得ぬ農作業だったんだ  
から、  
生活と結びつかんはず」  
と、彼女に話を返す。

# 歩く影

申 有人

一つのところが 二つに裂け  
うずく疵痕に鋭い爪を立ててせめぎあう  
二つのコトバの陰惨な悲劇を  
日本人は誰も知らぬ。  
惹かれながら 拒まねばならぬ  
「二ホンゴ」の痛みが  
拷問に傷ついたドレイの郷愁であることを  
在日朝鮮人は知っている。

星の光芒を忘れよう！  
深い夜が仄白み  
しのめの流す鮮血が  
あの星を跡かたもなく焼き尽したとき  
人間の廢墟を見なかったか。  
ほ、えみも 匂いも消えうせて  
はりさける胸に抱かれた  
冷たい亡霊を見なかったか。

血みどろに這いつくばる  
稚ない根は乾ききった土壌で焙られ  
遠い雲の乳房をせがんだ。  
父を抹殺し 母を圧殺し  
その悲しみを根元に灌いで  
異国で培った根は  
地中に埋まる自分の姿が見えなかった。

おれの影を呼んでいる  
幻聴？  
巫女の口寄せが産んだ  
生霊が  
腐臭ももる地底から  
おれを呼んでいる。  
彼女が鳴らす伽倻琴の冴えた音は  
二度と醒めない眠りをいざない  
幽閉された「未来」が襲つて  
おれの生身をずたずたに咬み砕くだろう。

人間の際涯を青い極光がふぶいたとき  
おまえの青春が血を浴びて摘んだ  
薔薇を葬れ！  
どんな暗い夜道でもおまえに目ませを送つて歩かせた

人間の破片を担ぎ  
孤り砂漠を行く旅人  
落日が茫々と地平線を紫に染める刻  
旅人は砂粒に沈んだが  
彼が曳きずる一筋の影が  
逆光の砂漠を鮮かに歩いて行く。

## 連合—F一二〇作戦記

向井 孝

I

78年11月18日(土)午後3時、事務所へへンな電話がかかってきた。

「20日、堺泉北港から四国、伊方原発へ積出す『核燃料』輸送阻止について、何か計画されていますか」

「エート、どちらさん...」

いつもの声、いつもの男からだ。

「はあ、あの...関大のもんですけど、何かするんやったら参加したい、と思ひまして」

「そりゃそれは...」

「で、三人ほど仲間がいるんですけど、いつでもどこへいったらエエでしょうか」

× × ×

部屋にいる5人はみんな、ぼくの方をむいて聞き耳たてている。

そこで、昨日から問題の『作戦』が、ぱつと決まった。

「ハイハイ、それね『山口県が断り、おはちがまわってきたものを、大阪では安全点検もせずに積み出し許可するんか』いうて、もう四回も府と交渉してるって、知ってはいりますか」

「はあ、ちよつとだけは...」

「昨夜は9時すぎまで、府庁ですったもんだをくりかえした。港湾課長がまことしやかに読みあげた『岸壁使用申請書』は、ナント苦しまぎれに府がつくった、マッカなニセモノ。それがバレると、もう話すことはない」と逃げ出した。とたん廊下でウロウロ、顔を出したのは、ひよつとしてあんなやつたのでは

「でね、今日も交渉中ですね。きつと最後は聞きなかってアチラさん、予定通り輸送を強行するやろいうことで、緊急動員体制を考えながら対策をねつてるところですね」

「すると...まだきまつてない？」

「ともかく今日の結果をみた上でないと、具体的にきまきません」

「それ、いつごろ判りますか」

「さあ、名前、住所、電話きいといったら、改めてしらせますけど」

「あの、えーと、こちら下宿なもんやから、

電話もちよつと...」

「何しろ急やから、動員するいうても、せいぜい千人たらず、それに海からの阻止行動も考えてるんで、一人でも二人でもようけ来てもらいたいんです」

「はあ、それは...あとでまた電話でも...」

「いや、ここは市民グループだけの事務所ですね。戦術決定会議は、別のところでやりまっさかい...」

「困ったナ...イヤそれやったら、また改めて...」

電話がきれると、みんなが一せいにしゃべりだした。

「千人の動員、海からのボートも出すやて...ゴツイ話や」、「そやけどちよつと位、ホンマに何かでけんやろか」「いざとなつたら10人、ムズカシイデ...」

II

11月19日(日)午前11時、みんな出かけてしまった事務所。壁に大きく吊り下がった『連絡』が目立つ。

19・20日の『連合・緊急行動』について。

午前班4人は正午より泉大津付近沿道に『危険ノ核燃料ルート』の標識

エフ貼示のため出勤中。で、午後来る人々に、次のことを伝達します。

① 明日早朝、予想される『核燃料輸送』に対しては『物理的な阻止行動を一切やりません』(泰山鳴動・連合F一二〇作戦)が今回の戦法です。

明朝、おそらく警察は、当地方未曾有の大警戒陣を陸海に展開するものと期待されます。

とすれば、その警備陣に空振り三振をくわせる。さらに、早朝からだ、事でない警察の動きに、沿道住民が気付いてさわぐ。つまり、一体この大警戒は何や、という住民の疑念・不安を警察サンが一そわかき立ててくれる—それが作戦目標の第一歩です。

(付記)テレビ車を泉北港に出す。阻止グループとインタビュしたい。機動隊が不当な弾圧をする場合、テレビカメラは証人として役立つ。テレビ車周辺で行動してもらおうとよい—という読売テレビディレクターの電話による申入れは、警察側の動きを傍証している。

② 19日夜、我家にいながら、誰もが参加できる電話ゲリラの大デモンストレー

ション! 別表の電話番号宛先(沿道六つの小学校長・PTA会長・消防署・新聞社支局・通信部)に、今夜、いろいろ工夫して電話してください。

(例1)「明朝、泉北港から積出される核燃料が、学校の側を通るときいた。大丈夫でしょうか。隣の奥さんは、子供の登校を午前中見合わせるとか言われます。学校側としては通過時の通報など受けておられますか。」

(例2)「警察が核燃料輸送で大変な警戒してるとききました。そんな危険物が学校のそばを通るのは本当ですか。万一のとき風上に逃げたらよいそうですが、学校としての対策はあるのでしょうか。」  
③(たかみの見物班)は、午前グループの一部がひきつづき現地にのこり、沿道要所および、港内へは釣人となって潜入します。19日夜半から20日早朝にかけての現地状況を刻々、電話で報告。20日午後配布ビラのキメ手となる『情報』をとるだけでなく、その夜のカンバイ用おさしみ調達という一石二鳥?

④ 11月20日(月)午後一時。全員現地駅前大集合!! (知ってますか! あなた

の町を核燃料車が...のビラが、泉大津の町をうずめつくすのだ。

\* (参考) いずみおおつ。南海ナンバ駅より25分。和歌山との中間、大津川三角州上にあつて大阪湾にのぞむ。人口四万三千。綿毛布、メリヤス、らしや地、染色、さらしなど、泉州地方の特産地。入り組んだ古風な路地の至るところで小規模の紡績工場が斜陽化した機械の音をひびかせている。

III

11月20日(月)快晴。やや寒し。

一晩中、ポストや工場の門柱のうしろにかくれていた私服たち。沿道要所百メートルごとに立っていた警官。

港入口を埋めつくしていた機動隊と、町中を駆けまわっていたパトカー。

それらが、まるで黒板ふきでふき消したように、ウソのように町中から消えてしまった午後。

いま、泉大津駅についた電車の大轟音とともに、ぼくらは空からの階段を降りてくる。

からつぽの駅前交番のまえをとり、

まるでビクニツクの恋人同士のように  
笑いさざめいて、町の中へと、国道を  
わたって分け入っていく。

みんな小脇にピラをはさんで。

× × ×

ピラをくぼる。

まず横丁にまがつて、八百屋の主人と  
お客に一枚。

通りすぎる女の子に「お母さんによん  
でもろてね」と一枚。

女の子の手にひるがえって、遠く小  
くピラが走っていく。

それを見送りながら、ぼくは佇立し、  
ゆっくり呼吸を停める。

やおら巻きおこってきた一陣の風。  
印呪をむすべば、たちまちぼくは孫悟  
空になる。

てのひらをかざして、満身の息をふう  
ーつと一と吹き。一しゅんぼくの分身  
三千人。宙を飛んで、小路小路に降  
り立つ。いま一せいに動き出し、戸口  
をはいつていくピラ。

ピラが話しかけ、ピラが走っていつて  
よびとめる。

ピラが電話をし、町内会をひらく。

ピラが電話をし、町内会をひらく。

ピラが教員会議をおこし、市会で質問  
する。

ピラが家毎から出てくる。だんだんあ  
つまる。声をあげて叫ぶ。隊列をつく  
って（核燃料工場）へと歩き出す：

★ピラ——（シュプレヒコール風に）  
知ってますか。

おとうさん。おかあさん。

核燃料！

熊取町から、四国、伊方原発へ

11月20日早朝。

機動隊に守られた輸送大作戦のナゾ！

海上には、九隻の巡視艇も出動！

ひたかくしの大坂府。

つんぼさじきの住民。

起つてしまつてからでは、もうおそい。

おとうさん。おかあさん。

こんどは何事もなくて、よかったナア。

★（ピラ裏面A）——（演説風に）——

今朝、まだうすぐらゐ6時ごろ、バトカ

1、機動隊カマボコ車、10台ばかりに前

後左右をまもられて、核燃料をつんだ4

台のトラックが、この町を走りすぎ、泉

北港助松卓頭へと姿を消した。

もちろん熊取町からの沿道は、猫の子

一匹みのがさぬ警戒体制。

港への立入りは前夜から泉大津大橋で  
通行止。卓頭入口にはガス工事中の立札。

その上、海上にはナント保安庁巡視艇  
9隻も、出ているというもののしき。

一体なぜ、こんな異常なまでの大出動で  
輸送を警戒しなければならなかったのか。

関係者は誰も口をつむいで答えない。

ある情報では——（核燃料）に加えて、  
耳かきパイで百万人を殺す「ブルトニ

ウム」が運ばれたのではないかとそれゆ  
え大阪府は、二七の書類をつくつて、こ  
まかそうとしたのではないかと。

★（ピラ裏面B）——（大ぜい口々に）  
熊取から助松卓頭まで、沿道には私の

子供が通う学校がある。

もし万一、道路上で事故がおこつたら、  
子供たちはどうしたらよいのか。

「絶対安全」というなら、なぜ事実を公  
開し、PRしないのか。

早朝、人目をさけた、警戒裡の輸送の意  
味は何か。

企業とべつたり一体になった、今回の  
大阪府、警察、消防のやり方を問い正そう。

こどもの安全と環境を守るために——

## 無人地獄（ずいひつ）

黒川 洋

○月△日 業務用電話のベルにたたき起こ  
される。

くそつたれ！と舌打ちしながら無意識に受  
話器を取りあげている。夜勤の班長が息切ら  
せてまくしたてている。A変電所で受電の開  
閉器が入らないという。職場まで歩いて二分  
の杜宅住まいでは断わるわけにもいかず。六  
年の間何時もこの調子なのだ。自動化とはい  
いながら旧態依然の人員構成。

8～16時 5名（3名出向要員）

16～22時 3名（1名出向要員）

22～8時 2名（出向要員なし）

休日 2名 といった三交替

である。夜間の緊急時、作業については非番  
者の動員をかけるというまるでマシンに振り  
廻されている毎日である。15個所の無人変電

所を抱えているわけであるから、経営側にし  
る組合側にしろマシン絶対主義といった感じ  
である。事故の復旧処置が終れば事故例検討  
会というやつで机上勤務の管理部門からは叩  
かれる。手順を間違えれば他人を傷つけたら  
死にいたらしめたり、我身もいづれそうなる  
であろうという不安抱きながらの毎日である。  
日本におけるマシン信仰及び人間さまよりも  
マシンを大事にするといった思想は明治以降、  
先進国からの技術導入の歴史的背景もさるこ  
とながら、資源の豊富でないという国情に裏  
打ちされた物を大事にしなければならぬ、  
といった戦時の天皇信仰との結びつきも亦必  
然であったのかもしれない。現代におけるオ  
ートメーションによる大量生産は資本側の  
要求する消費としての使い捨て時代ではある  
けれども、石油パニック時（マスコミの責任  
によるものだが）の狂騒を思い起こしてみ  
るとよい。衣の下からあの精神主義が見えたり  
することが恐いのだ。

鬼畜米英であれ、生産性向上であれ、日米  
独占資本であれ、一つの目的のために収斂さ  
れていく状況に慣らされていく日々が恐いの  
だ。現在私は労資のふたまたかけた自動化ブ  
ロジェクト（こう書くとかつこうはいいのだ  
が）の専門委員とかいうやつに選ばれてしま  
ったことを後悔しながら、経営側の会議、労  
組側の会議と飛び歩く毎日である。そこで感  
じた事は死んでるなどということである。たと  
えば経営側の会議では、本店で定められた技  
術基準が現場の側にそぐわないから変えてく  
れと申し出ても行動を起こしてくる役職者  
は誰一人としていない。本店から出されたも  
のにクレームをつけることはタブーなのだ。  
そのために一人の従業員が重傷を負ったとし  
てもである。又、組合側の会議では、現場か  
ら三交替の要員をふやして欲しいという意見  
が出たとしても本部、本店間で決められた人  
員構成を考へることはもとより、支部から本  
部へ答申書を提出することもしぶつていいる有  
様である。そこで、組合のなんたるかを言語  
に気を配りながら発言しなくてはならない。  
大企業の技術神話はすでに崩れかけているの  
である。私達の立場は技術屋から消費者に廻  
されていることに気づくのだ。

## 作品の批評

「前号作品評」に対して格別な意見がないことに少しやきもきしていたところ、やっと僅かばかりの反応があつてホッとした。本誌の作品評は目下のところ安心できるものとはまだ言えない。同人中の三人の意見交換を基幹として、誰か一人が書くという方式だが、本号を含めて三回の結果は、かつて清水清が一人でやっていた当時に比べて、それ以上とはいえない。しかし、当事者たちは努力して、兎角評者と作品の立場は逆なもので、しつくりとつかないのが普通であるが、そこを越えて見たいという願望が発案者の私には強い。まま評者のカンちがいも起っているようだが、われわれは詩の批評とは何か、如何に為すべきものか、を究めてはいない。批評の方法なんてまだ確立してない、といった方がいい現状での作品評の試みには協力して欲しい。協力とは評言に対して強力に反発することもある一つであると私は考える。(秋山)

でシステム化されている現状では、その労資が抱えている技術幻想とマシンの信仰などお笑い草なのだ。テレビのCFで鉄塔作業の映像がひんぱんに流れる。過酷な条件下の労働という世論受けのする映像である。何時だったか幕尾淳にあんな仕事をやっているのかと問われたとき返事に困ったことがある。下請けの人達の作業をあたかも社員がやっていると言わねばかりのそれである。この背景には原子力発電の拡大化が確実に存在しており、電力連の幹部が環境保護を強調しながら労組も応援体制を確立して行くと言言したばかりである。前述したように技術神話が崩壊しかけている組織にその保障は何も有りはしないのだ。

黄色い車に乗って  
揺られ揺られて行く先は  
その名も高き 電力の  
無人地獄の変電所

らだ。石油メーカーや化学工場で初歩的なミスによる事故が起きるのも当たり前なのだ。その技術的な精度の高い技能を持ち合わせているのは、下請工の人達であり、メーカーのその部門ごとの人達であるからだ。私のやっていることと言えば、変電所の改造等を工事係の担当が設計する(もつとも100%完全なものでない)現場に降りてくる、下請が決定され工事が開始される。保修部門と私の居る職場から監理に出る。保修部門が設計基準に乗っとり作業を進めていくなかで、制御に差しつかえないかどうかを設計基準に照らし合わせながら、保修部門と作業者の安全対策と監理をするだけのことなのだ。作業を請けた側には代人が設定され、その代人の下に作業員が数人居るわけであるが最近の傾向として、孫請けといった形が多くなった。このシステムは落札した企業が現場代人を一人出し、その傘下の作業員は中小の企業に再発注するという形であり、実際に身体を使って作業する側は一割〜二割はピンハネされているはずなのだ。資本の収奪である。こういった過酷な条件下で良い仕事などが出来るわけがないではないか。大企業の発注方法がこういった形

## 編集後記

◎立川に住む申有人が同人に参加した。目下の同勢は三十一人である。

◎戦後三十数年にしてコスモスがようやく六十号を越えた。その記念になることを何か、という発言がちよいちょいある。賛成だ。だがその記念行事としては、特別な編集の記念号を出す、講演会、あるいは四十号のときのような雑誌・詩集の展示会などもある。

◎この記念事業に加えてもいい思いつきが今一つだけある。コスモス同人の物故者からえらんで、その数人の詩人の研究論文を集めて特集をつくる、などのことも話題になっている。創刊から三十年となれば一人の半生にも及ぶ。この間コスモスとふかくかわりあつた一人として、同人の物故者などという立止まって指を折って考えてしまう。古くは植村謙や伊藤和やえのきたかし、近くは金子や岡本、宮崎護、斎藤峻、それに壺井繁治もいる、と思ひ出して来ると、これらの人々が築いたコスモスの性格と現在のコスモスとの異と同一についても考えることを強いられる。

◎ささやかでも、一九七九年中にはコスモスの過去と現在と未来に亘ることを、と皆で考えた。

◎内田博全詩集の会をコスモス社と方方社の発起で、十一月二十五日に東京上野の花山亭でやり、九州、阪神、東海、関東などひろい地域から集まって、たのしい会になった。ちやうどその数日前に出来た岡本潤詩集もその会場に持参して並べることが出来、また復刻の『プロレタリア詩集』の中巻(『詩精神』二十一冊)も当日展示できてよかった。

◎コスモスの慢性遅刊病はまだ全快せず、当初の一九七八年中四冊という意気達は、年末編集とまでは漕ぎつけたが、その第二号は来る一月中旬にやうやうというところになってしまった。事務者の不慣れも大きな原因、しかし原稿、同人費の締切は大分守られるようになったから、そこをもう一ふんばり、計画通りの刊行が可能のところまで来た。

◎まだコスモスの作品は不十分、この不備が作品合評会にもあらわれ、批評への不満ともなるらしいのだが、前々回の木原、前回の村松につづいて今度は向井が刻下の反原発運動について書いた。何故か国民が忘れた願つき

でいる原発反対の問題を新しくかき起すための状況報告である。どの大雑誌もかかる報告は書いていないものであることを力説する。

◎戦後一九四七、八年頃から、コスモスにもつとも早く同人となった長谷川七郎が、ユニークな詩集『通過儀礼』を出した。長谷川のはじめての詩集であり、コスモス同人の中でも長谷川のみの表現力によるたのしい詩集。この詩集にふさわしい記念集会が一月二十日、東京で行われた。

◎今回の紙面は向井の努力が大きかった。忙しい向井におんぶしてしまった。

◎前号村松の「ライ者の文学」について『新日文』から転載の申込があり、筆者と相談の上、応ずることとした。

### コスモス 第22号 (通巻61号)

▲定価五〇〇円 千二〇〇円▽

発行 一九七九年二月一日

編集人 秋山 清

発行所 東京都中野区上鷺宮五二八八

コスモス社

電話 03 九九八一二九五

印刷 (資) オカダ印刷

名古屋市中野区長戸町四二〇